

第196回
愛知学院大学モーニングセミナー

七宝焼の魅力を探る
～愛知から世界を魅了した工芸～

あま市七宝焼アートヴィレッジ
小林 弘昌

令和4年7月12日



七宝の名

- ◆ 七宝とは仏教の経典に表される七種類の宝物「金・銀・瑠璃(るり)・砵磈(しゃこ)・瑪瑙(めのう)・真珠(しんじゅ)・枚塊(まいかい)」のことで、七宝焼とはこれらをあわせたかのように美しいものであることから名づけられている。

× 七宝町で作られるから七宝焼

七宝焼の材料と作り方



七宝焼の製作工程
1 素地づくり



2 下絵描き



七宝焼の製作工程

3 植線





七宝焼の製作工程
4 施釉

現在は電気炉で焼く。温度は700℃から800℃くらいで時間は10分～15分くらい。



七宝焼の製作工程5 焼成



七宝焼の製作工程
6 研磨

七宝焼の製作工程 6 研磨



七宝焼の製作工程 7 覆輪付け

七宝焼とは

- ◆ 金属(主に銅)の素地にガラス質の釉薬を焼き付けたもの
- ◆ 似たものとして= 琺瑯(ほうろう)
- ◆ エナメルバッジ



七宝工 梶常吉

天保4年(1833)

- ◆ 蘭人齎す所の七宝焼に類せし皿を購求し、其器をうちくだきて製法を研究し、はじめて試に筆筒、香盆をつくりしも、或は苦し嵐或は毀損し、完全の器を製すること能はざりき、されども常吉屈することなく、益々琢磨して遂に直径五寸の小盒をつくり、……………
- ◆ (『工藝鏡』 明治27年刊)



梶常吉以降

- ◆ 常吉此法を林庄五郎に傳ふ庄五郎これを塚本貝助、塚本儀三郎に傳ふ、皆同郡遠島村の人なり貝助これを同村の人塚本甚右衛門、桃井英升、横浜の人山本又三郎、及東京七宝会社に傳ふ、甚右衛門これを名古屋七宝会社に傳へ、英升これを並河靖之に傳ふ・・・



(七宝焼の説 横井時冬 明治27年)

林庄五郎 作

第1回内国勸業博覧会

- ◆ 会 期 1877年(明治10)8月21日～11月30日
- ◆ 会 場 東京・上野
- ◆ 出品物 14,455種 84,352点
- ◆ 入場者数 454,168人
- ◆ 2月に西南戦争勃発
- ◆ 出品人16,172人 褒章受賞5,096人

●七宝審査評語

●七宝会社 龍紋 銅陶七宝器

●「開社以来衆工を募集して製造に従事し意を改良の一途に注ぐ初め澳国の会に観る所の製品米国の次会に至りては更に精良別手に出るが如し此会又一層の進歩を表す。其技月に進み年に長ず奨励の功偉なりと謂うべし・・・」

第2回内国勸業博覧会

- ◆ 会 期 1881年(明治14)3月1日～6月30日
- ◆ 会 場 東京・上野
- ◆ 出品物 85,366種(14,455)
- ◆ 入場者数 822,395人(454,168)
- ◆ 褒章数 4,031人(5,096)
- ◆ 出品人31,239人(16,174)
- ◆ ()は第1回の数

- ◆ 第2区 製造品第4類 七宝
- ◆ 出品者 26人
- ◆ 受賞 有功2等賞 1 竹内忠兵衛
- ◆ 有功3等賞 1 原不二夫
- ◆ 褒状 3 武田常助 伊藤市左衛門
- ◆ 七宝会社出品人(塚本甚平・
- ◆ 塚本甚右衛門・林小伝治)
- ◆ (並河靖之 有功2等)
- ◆ 第3区 美術第3類
- ◆ 名誉賞牌 七宝会社
- ◆ 妙技三等 山田甚助

七宝器 愛知県の評

- ◆ 「……竹内忠兵衛、原不二夫、武田常助、伊東市左衛門の出品は欠点較多しと雖も或は高大を以て勝り或は緻密を以て優れ之を常工の所製に比すれば皆数等の位地を高くせり本県の七宝に富める亦驚く可し」

● 審査評語

● 武田常助 七宝獅子画平皿

- 「銀線細密にして色彩の配置宜しきを得其製造の練熟頗る嘉す可し」

● 伊藤市左衛門 七宝巨花瓶大皿

- 「七尺の花瓶に連環垂下せる鳥耳を付したるは意匠に乏しと雖とも此巨器を製する労力少からす三尺の大皿は価格至廉なり頗る嘉す可し」

第3回内国勸業博覧会

- ◆ 会 期 1890年(明治23)4月1日～7月31日
- ◆ 会 場 東京・上野
- ◆ 出品物 167,066種(85, 366)
- ◆ 入場者数 1,023,693人(822, 395)
- ◆ 褒章数 16,152人(4,031)
- ◆ 出品人77,432人(31,239)
- ◆ ()は第2回の数

七宝出品数(第1部)

- ◆ 京都 9点 神奈川 33点 愛知 160点
- ◆ 和歌山 2点 計 204点

- 濤川惣助一名誉賞牌(一席) 第2部
- 並河靖之一一等妙技賞 第2部
- 林小伝治一褒状 第1部

- 第1部 工業 第4類 七宝
- 第2部 美術 第4類 美術工業
- 漆器 金工 鋳工 陶磁器
- 七宝 織物繡物 家具

第4類七宝 審査報告より

- ◆「七宝は近年に至て一大進歩を効し、大に海外に称揚せられ、本会特に名誉の賞を獲たり、……」
- 「・・愛知県は本邦七宝の首重なる産地にして、名古屋遠島両地の製産頗る多し、今回の出品は第一部に多くして第二部は僅々の数に過ぎず、随て出品人員も亦二三に止まれるは甚遺憾とする所なり是れ畢竟製造者が七宝其物の性質如何を了知せざるに由るか、若し平素製する所のもの皆此方針を執るとせば其発達を阻害する実に少なからず、今にして之か針路を定めされば必ず将来の不幸を来し、遂に名利二つながら失ふに至るへし。営業者宜しく注意すべきなり。……」



紺地蝶文花瓶(明治)
高13cm

第4回内国勸業博覧会

- ◆ 会 期 1895年(明治28)4月1日～7月31日
- ◆ 会 場 京都・岡崎
- ◆ 出品物 169,098種(167,120)
- ◆ 入場者数 1,136,695人(1,023,693)
- ◆ 褒章数 17,729人(16,115)
- ◆ 出品人73,781人(77,432)
- ◆ ()は第3回の数

◆ 第四回内国勸業博覧会審査報告より

◆ 愛知県 への評 審査官 納富介次郎

◆ ①旧態普通品

◆ 「…瑠璃の製法は一般に伴て多少改善し素地植線焼窯研磨等の諸術上手になりて値安く製造するを得るのみ…」

◆ ②龍の絵

◆ 「…其顔の鬼に似たる者さへありて甚卑し…」

◆ ③龍鳳麟獅鶴蝶模様並に菊桐雑模様

◆ 「…多少其巧拙はあれど概して製作は精好なり然れ共かく同様のものを多人数にて出品したれば審査の結果は悉く之を陳腐となせり…」

◆ ④花鳥其他の絵並に模様

◆ 「…少し上等品の好図と見れば互に人真似する固癖の未だ全く免れざるか…」

◆ ⑤透明深紅色

◆ 「…近來の創製に係る佳品なり…規約を設けて濫造を抑制し細くも珍物の名を保つ事を図り度ものなり」

◆ ⑥無線画

◆ 「…濤川風を模擬するが如き卑劣心を去て別に一趣味変れる所を研究すべし…」

◆ ⑦無画無紋

◆ 「…貴重なる七宝器を以て値卑しき西洋磁器の体面を仮るは抑顛倒したる考へならずや…」

◆ ⑧蒔絵画体

◆ 「…愛知七宝の最新物なり偏に望む營業者の協力によりて粗製濫造に流れず永く特別品の名譽を保持せむことを…」

◆超絶技巧いろいろ



第5回内国勸業博覧会

- ◆ 会 期 1903年(明治36)3月1日～7月31日
- ◆ 会 場 大阪
- ◆ 出品物 276,719種(169,098)
- ◆ 入場者数 5,305,209人(1,136,695)
- ◆ 褒章数 36,487人(17,729)
- ◆ 出品人130,416人(73,781)
- ◆ ()は第4回の数

◆ 第五回内国勸業博覧会審査概況より

◆ 七宝

◆ 「七宝ハ第二回ノ博覧会以来無線ノ製作法著ク進歩シ三回、四回共ニ世ノ称賛ハ主トシテ無線ノ製品ニ属セリ而シテ爾来其事業ハ東京府ト愛知県ニ於テ著ク発達シ今回出品ノ数ニ於テハ愛知県最モ優勢ヲ占メ製作モ亦他ニ遜ル所ナク有線、無線相互交用シ或ハ図様ノ幾分ニ凹凸ヲ與ヘ色彩ノ配置殊ニ麗シキ愛知県安藤重兵衛ノ製作ノ如キハ更ニ一段ノ進歩ヲ加ヘタルモノト云フモ不可ナカルヘシ」



間取り花鳥文大花瓶

高152cm

(あま市七宝焼アートヴィレッジ)



1893シカゴ万博
桜花群鶏旭日図大香炉 林喜兵衛

